

# ムラのミライ 活動レポート & ニュース

2018  
7

## CONTENTS

- Report 1** ムラのミライ活動報告会レポート  
私にとって、ムラのミライの活動とは？  
前川香子 ムラのミライ事務局次長／海外事業チーフ  
菊地綾乃 ムラのミライ海外事業コーディネーター  
田中十紀恵 ムラのミライ事務局長  
宮下和佳 ムラのミライ専務理事／事務局  
山岡美翔 ムラのミライ理事／事務局
- Report 2** 医療×メタファシリテーション勉強会レポート  
医療の現場で、一人ひとりの生活から地域を作っていく  
田中十紀恵 ムラのミライ事務局長
- Report 3** 認定NPO法人ムラのミライ 2017年度 年次報告  
2017年度の総括と2018年度の展望／セネガル／ネパール／子育て  
ファシリテーターの育成・派遣／財務状況



### 認定NPO法人ムラのミライ

高山事務所 〒506-0032 岐阜県高山市千島町900-1 飛騨・世界生活文化センター内  
電話 0577-33-4097 Fax 0577-34-5671

関西事務所（本部） 〒662-0856 兵庫県西宮市城ヶ堀町2-22 早川総合ビル3F  
電話/ Fax 0798-31-7940

E-mail [info@muranomirai.org](mailto:info@muranomirai.org) ウェブサイト <http://muranomirai.org/>



# 私にとって、ムラのミライの活動とは？

2018年6月10日に開催した「ムラのミライ活動報告会」で、各スタッフがリレートーク形式で発表した内容を一部ご紹介します。

各事業についての情報は、8ページ以降の「年次報告」もご覧ください。

## インド

### 村で農業を続けていくために

私がインドで駐在を開始したのが2006年1月でした。そのころのムラのミライでは、書籍『南国港町おばちゃん信金』で紹介している、インド都市部のスラムの女性たちによるマイクロクレジット活動をしていました。そして、次に始めたのが農村部での小規模流域管理に関するプロジェクトです。インドでは、2011年の新聞報道によると、アーンドラ・プラデシュ州内で、地下水が枯れ、水が出なくなり、人が住まなくなった農村が1,514村あったそうです。その数字を見てとても驚きました。

私たちが活動する村の人たちも、ずっと「水がない」と言っていたのですが、実際には水がない

のではなくて、水のマネジメントができていないということだったんです。そこで、小規模流域という考え方を取り入れました。どうやって水資源を管理し、効率よく使っていくのか。「あれをしろ」「これをしろ」と言われるのではなく、自分たちで水を管理したい、村で農業を続けるためにどうすればいいか、村人自身が考えて実行できるように事業を進めてきた7年間でした。私の知っている限りでは、村の人達は今でも活動を続けています。

この活動を経て、アフリカでも水と土に関する活動をしようということになりました。インドでの経験や技術が、セネガルでの活動で広まってくるといいなと思っています。

(前川香子 事務局次長／海外事業チーフ)



## セネガル

### 水と土に問題を抱えた畑で、 農業のやり方を見直し、実践

私は2017年5月からセネガルに駐在しています。セネガルはアフリカ大陸の最西端に位置し、私たちが活動しているのは首都から70キロくらい離れた村です。セネガルの年間降水量が500ミリで、これは日本の3分の1弱にあたります。また、土にも塩気があり、農業に不向きな土壌になっています。農業が十分にできない環境で、農業でお金を稼ぐことができない若者たちは、都市へ出て門番をしたり、工事現場で働いたりします。

ムラのミライでは2017年2月から3年間の予定で、現地NGOのIntermondes（アンテルモンド）や、60人の農家さんたちと一緒に活動しています。今、私たちがやっているのが、これまでの農業のやり方の見直しです。例えば、水が足りないという問題では、効率よく水を使うために水やりの方法を見直すことができます。事業地の村では、朝と夕方の2回にわけて水やりをしています。しかし、夕方に水やりをしても、水はあまり土の中にしみこみません。朝に水をやるほうが効率がよく、使う水の量の節約にもつながります。

2018年度はこうして見直したことを、農家が自分の畑で実践してみることをめざしています。土と水の問題は、農業の話だけではなくて村の存続にも関わることです。最後に選ぶのは村人たちですが、プロジェクトに参加している農家たちが、学びを他の村人たちにも広めていくということが起きればよいなと思っています。

（菊地綾乃 海外事業コーディネーター）



## ネパール

### ゴミ問題が投げかける「私の暮らし方」

ネパールでの活動は2012年から始まりました。インド、セネガルと同じく「水」に関する活動ですが、家庭からポイ捨てされるゴミや排水で汚れてしまったバグマティ川の汚染を食い止め、地域の人たちが川と周辺環境を守っていくことをめざしたものです。

2017年度は、学校で「ゴミ箱から世界を見よう！ゴミ組成調査」を実施。これまで一緒に活動してきた女性たちと授業の方法を考え、生徒たちと学校のゴミについて調べてもらいました。その中で再利用できるもの、リサイクル業者に出すことができるもの…と分けていくことで、「ゴミは減らすことができる」と自分で発見してもらうことが狙いです。

でも実は、ネパールの人たちよりも私のほうがゴミを出していたんです。日本にいた時には、ゴミの行方を考えたことはありませんでした。それは、日本では莫大なコストをかけてゴミ処理をしていて、ゴミが見えないからだと気づきました。決して日本人が勤勉で、ネパール人が怠け者で…ということではないんです。ネパールでの経験が、「これから日本でどのような暮らしをしていきたいのか？」という問いを投げかけてきた、そんなネパールでの暮らしでした。話が日本に戻りまして、ここからは日本での活動の紹介に移ります。

(田中十紀恵 事務局長)

## 講座・研修

### 危険だけれど魅力的？

### メタファシリテーション手法

ここまで紹介したように、ムラのミライはどこでもなんでもやっているんですが、一つだけこだわりがあって、それがメタファシリテーションと名付けた私たちのやり方です。いろんなそばを提供するけれど、そばの打ち方だけにはこだわりがある、そんなそば職人のような団体です。

今、私が主に担当しているのは、このメタファシリテーション手法をいろいろな人に伝えるというものです。ですが、最近はこのやり方をぜひ使ってくださいとはおススメしないようにしています。「なぜ？」と聞かないのは、とても我慢が必要なんですよね。そして、事実質問をひとつひとつ重ねていくことで、まさに先のネパール事業であったように、自分が変わらなければならないことにも気づいてしまう。そういう意味でとても危険な方法でもあり、魅力的なやり方なんです。

ですが、ありがたいことに、国際協力活動に携わる人だけに留まらず、例えば学校の先生、医療・介護に従事する人たちにも、メタファシリテーションを使ってもらっています。これからは、学校の先生のため、医療従事者のため…といった「●●のためのメタファシリテーション」もできるのではないかと考えています。

次は、これからの日本の私たちを考えていくのにつながると確信している子育てに関する活動の紹介です。

(宮下和佳 専務理事／事務局)



## 子育て

### 「助け合う子育て」の一步は 自分の生活をふりかえるところから

セネガルやインドでの挨拶を紹介していましたが、子育てプロジェクトに関わるお母さんたちは、会った時、まず何を聞くでしょうか？最近の打ち合わせを思い出すと、「ご飯食べた？」とよく聞き合っています。そんな忙しいお母さんたちと一緒にやっている活動です。

子どもが生まれてすぐの頃、「なんで子育てがうまくできないんだろう」と悩んだ時期がありました。家族との会話も減り、このままじゃマズいなどと思い、保健師さんに相談したこともあります。そこで「あなたらしくがんばればいいのよ」と言われました。でも、私らしくと言われても、どうやったらいいのかわからない。その時、メタファシリテーションを使って、自分の暮らしをふりかえてみたんです。そうすると、私には赤ちゃんのお世話をしたという経験が圧倒的に少ないことに気づきました。住んでいる地域の情報も

なかった。一方で、家族や子育て支援センターという活かせる資源もあるなど気づいたんです。この経験を生かして、西宮で活動する「ア・リトル」と一緒に子育て講座を始めました。

この講座に参加された方からは、「夫からの反応が悪くイライラしていたけれど、自分から語り掛ける言葉が悪かったと気づいて、その後は夫婦の会話が増えた」というコメントを頂きました。

2018年度から「ア・リトル」との協働で始まったプロジェクトでは、「助け合う子育て」とは何かというのを当事者が考える時間を作っています。今、自分の暮らしはどういうものか、何が足りなくて、一方で何が活かせるのかを明らかにする。いきなり「あなたらしい子育て」と言われてもどうしていいかわからないですよね。だからこそ、自分の生活を点検する、そこから助け合う暮らしを始めていこうというのがこのプロジェクトの一番大切なところなんです。

(山岡美翔 理事/事務局)



# 医療の現場で、一人ひとりの生活から地域を作っていく

田中十紀恵（ムラのミライ事務局長）

2018年3月、医療におけるメタファシリテーションの実践に関する勉強会が開催されました。講師は医師として活躍しながら、地域づくりにも取り組んでおられる平野貴大（ひらのたかひろ）さん。その勉強会のようすを、少しお伝えします。

## 地域づくりに関わろうとしたきっかけ

なぜ、医師である平野さんが、地域づくりにも取り組むようになったのでしょうか？

人口減少と高齢化が進み、医療や介護を、人的にも資金的にも支えられなくなってきつつある現在。そこで、医療・介護を地域住民で支え合おうという「地域共生社会」の考え方が政府によって提唱されました。ですが、従来は医療機関等が担っていた医療・介護サービスを、曖昧な「地域のつながり」の名のもと、住民に肩代わり（しかも無償で）させよう…とも見えますね。

これに対し、平野さんは「隣近所でモノの貸し借りや、声掛けができるようになれば、それは十分に地域共生社会なのではないか」という思いから、地域づくりに取り組んでいるそうです。

## 平野貴大（ひらのたかひろ）さん プロフィール

青森県出身。2013年に自治医科大学を卒業し、2015年より国民健康保険大間病院勤務を経て、2017年より弘前大学大学院医学研究科 総合診療医学講座で研修を行った後、2018年より中泊町国民健康保険小泊診療所勤務。200年後も地域で幸せに過ごせることを目指し、住民団体の活動を幅広く支援するとともに、人口減少社会を支える医療を実現するための活動を続けている。

### 【参考文献】

書評：平野貴大、加藤博之（2018）「単純な”事実質問”の集積が驚くべき対人援助効果を発揮する 中田豊一『対話型ファシリテーションの手ほどき』」、『弘前大学教養教育開発実践ジャーナル』vol2,p75-76、弘前大学出版会。

## 住民が地域につながっていくためには

平野さんがまず取り組んだのは、人がつながっていくための勉強会やワークショップの開催。ただ、医療・介護や地域づくりに関わる人たちとのつながりはできたけれど、診療の場で会う患者さんたちが、彼らとつながれるのか？という疑問は残ったまま。こうした紆余曲折を経て、自分たちが関心のあることをやるのではなく、住民が本当に困っていることに専門職（医師）としてどう関わるか？という視点に変わっていったそうです。そんな時に、平野さんは『対話型ファシリテーションの手ほどき』を読み、メタファシリテーションに出会いました。

## メタファシリテーションは医療の診療現場での問診で使えるか？

その後、学部生向けの授業、勉強会、学会、研究会…いろいろな場でメタファシリテーションを実践。メタファシリテーション手法のことを、当時所属していた大学院の仲間と話したところ、「それって問診だよ」と返ってきたそうです。

# 入院させる人って？

- 医学的要素
  - 頻回の点滴が必要、経口摂取が困難、  
急変リスクがある、酸素が必要、  
隔離が必要、自傷他害の恐れ
- 社会的要素
- 心理的要素



写真提供：平野貴大さん

そして、伝説の総合診療医の言葉に「初診の人にはビデオを撮るように問診しなさい」というものがあるそうですが、事実質問を使って細かく聞いていけば、「ビデオを撮るように聞ける！」と気づいたといいます。

例えば、「お風呂上りにめまいがした」という方の話。「めまいがしたのは浴槽に付いているときですか？」「浴槽から出た時ですか？」「脱衣所から出た時ですか？」…と細かく聞いていくと、めまいがしたのはお風呂上りではなく、お風呂から上がって、2階にある自室に戻ったタイミングだったことがわかったそうです。

## 問診と村のインタビューが重なる

これら勉強会で出てきた事例を見ていると、痛みや体調不良を訴える方をよく観察し、仮説を立て、事実質問で検証するプロセスが、村でのやりとりと同じであることに私（筆者）はとても驚きました。実は、先ほどご紹介した「ビデオを撮るように」という言葉、私も以前に「話し手と聞き手の間で（余分な解釈の入らない）映像が浮かび上がるように、事実を細かく聞いてみなさい」とアドバイスされたことがあったのです。医療分野には門外漢な私でも、ムラのミライの現場の話と医療での実践の話がピタリと重なったような気がしました。

## 一人ひとりの生活から地域を作っていく

「2017年に獣害をテーマにした、ムラのミライのフィールド研修に参加して、一人ひとりの生活があり、その集まりが地域になるのだと気づいたんです。今は集団・コミュニティでなく、個別に対応していくことが、自分にできることなのではないかと思っています。」と平野さん。今後、医療・介護の現場で、外来診療で行動変容を促すのに事実質問を使えないかと考えているそうです。

「地域」というのはとても便利な言葉で、なんとなく意味がわかった気になりませんか？

でも、「地域」とひとまとめにすることで、個々の事実からは目をそらしてしまう側面もあります。「地域住民が～」と言っている、誰のことも、どこのことも指してなかったなんてこと、ネパールの現場でもたくさん経験しました。

ですので、上記の平野さんの言葉は、一人ひとりの事実を積み重ねていくことで、実体を伴った「地域」が見えるということなのではないかと考えています。

ムラのミライでは、今後、こうしたトピック別の勉強会や講座も開催していきたいと考えています。さまざまな人の手で、国際協力以外の分野でもメタファシリテーション手法が広がっていくか…はまた、次号以降のニュースレターで。

# 2017年度 年次報告

第25期 2017年4月1日から2018年3月31日

## 2017年度総括および 2018年度展望について

代表理事 中田豊一

2017年度は、前年にも増して活動が充実してきた反面、すぐには資金獲得に結び付かず、やり繰りに追われる年になりました。しかし、会員・支援者のご協力を得て、何とか乗り切ることができました。おかげさまで、2018年度はその果実を収穫できる年になりそうです。

2017年度、国内でもっとも注力したのは、「子育てファシリテーション」でした。母親ひとりですべての子育てをするという人類の歴史から見れば異常としか言いようのない「ワンオペ子育て」を克服するために、メタファシリテーション手法を活用しようという試みです。西宮の子育てグループ「ア・リトル」との幸運な出会いもあって、活用が広がっています。

海外では、セネガルでのプロジェクトが本格的に動き出しました。駐在員が赴任し、村での研修が始まり、短い期間にも関わらず、農民たちの意識と行動が目に見えて変わっています。2018年度からは、こうした成果と手法を、映像などを使って日本の皆さまに広く伝えながら、手法の普及と人材の育成に力を入れていく予定です。

2012年から始まったネパールのバグマティ川の浄化と環境教育を通じて地域のつながりを取り戻す活動は、2017年度からムラのミライからの直接関与は最小限に抑え、現地住民に活動の主体を移していくことに注力しています。2019年まで続け

る予定です。

さらには、2年あまりかけて準備してきた「住民参加型持続的地下水資源統合管理プロジェクト」がようやく立ち上がり、その開始作業が始まっています。このプロジェクトは、いわゆるドナーを挟まず、イラン政府から直接委託されて実施を担うものです。これまで経験したことがないほどの大掛かりな事業なのですが、イランを巡る国際情勢がますます流動的になっているため、順調に進めて行けるかどうか、予断を許さない状況が続いています。そのへんも含め、適宜、皆さまに報告していくつもりです。

こうした中、当面の最大の課題は、何と云ってもメタファシリテーション手法を駆使できる人材の育成です。着実に育ってきているものの、海外の現場での即戦力や講座や研修の多用な要請に柔軟に対応していける人材はまだ限られているのが実情です。

とはいえ、当会は、仕事のために生活があるのではなく、生活のために仕事があるという原則を貫いています。スタッフの過重労働により労働力の帳尻を合わせたりはしません。さらには、「充実した生活って何だろう？」というような抽象的な問いを問いかけたままに終わらせず、実体化していくためにもメタファシリテーション手法を活用しています。

こうして、様々な切り口で社会と生活に切り込んで行けるようになりつつあるのは本当に嬉しいことです。皆さまのさらなるご参加とご協力を期待しています。



## 土と水を守り、活用するための 農業研修がスタート！

### 2017年度の活動

#### モデル農家養成研修

- ・ 雨水の流れと土壌侵食、水・土の保全対策
- ・ 作物の科と輪作を活用した栽培計画
- ・ 研修内容の振り返りと農作業工程の収支計算

について、計3回の研修を実施しました。

また、研修後の課題の進捗状況の確認や次のアクションの打合せのためモニタリングを計7回実施しました。

#### 「ファーマーズ・スクール」の整備と計画

プロジェクトを開始してから、実際に参加してくる農家の農地との距離や、研修施設の建設実効性の難しさから、「ファーマーズ・スクール」の位置づけを変えました。

#### ■成果

研修に参加した農民たちが、上記モデル農家養成研修で扱った農業をする上での基本的な事項を理解し、以下を実践するようになりました。

- ・ より効率的、効果的な水やり方法の導入
- ・ 水と土を保全する対策を住民（研修未参加者）と共有し、研修生の畑で対策を実行
- ・ 作物の科に留意した効率的な栽培計画の策定

#### ■課題

地域資源へのアクセスの制約（土地の所有権の問題など）や、それぞれの村で今後、どのように知恵や実践を普及させていくかが、課題として見えてきました。

### 2018年度の活動計画

#### ファーマーズ・スクールの整備

地域資源を活用した農業モデルを実践・普及する場として、ファーマーズ・スクールを整備していきます。

#### モデル農家養成研修

地域資源を活用した農法を実践し、持続的な農業経営を行える青年を養成し、指導員養成研修を実施していきます。

#### 指導員の養成

自分たちの村や他の村の住民に対して研修を実施する指導員を養成していきます。

#### PROJECT DATA

#### 地域資源の循環による農村コミュニティ生計向上プロジェクト～農村青年層のための「ファーマーズ・スクール」

**どこで** セネガル共和国ティエス州ンブル県ンゲニエヌ行政村

**だれと** 16～24歳までを中心とした青年300人  
（JICA「草の根技術協力事業パートナー型」）

**なにを** セネガル農村部に住む主に若年層の農業従事者が、自分たちの地域において、自然資源を活用しながら農業で生計を立てられることを目標とした事業。水や土を守りながら農業の効率性を上げる知恵を共有し、実践を定着・普及させていくために、研修や農業実践の場の提供（ファーマーズ・スクール）を通して、農民たちの活動を支援します。



## ゴミを減らすには、 まず自分の身の周りを知ることから

### 2017年度の活動

#### 分散型排水処理施設（DEWATS）の建設

バグマティ川に流れ込む家庭排水を浄化するための分散型排水処理施設（DEWATS）1基を建設。建設と並行して、環境保全に向けた行動を起こすのは自分自身であることへの理解を促す研修や、施設の維持・管理に必要なコストやルールを決めていく研修を行いました。

#### ゴミ分別ための教材の作成

エコレンジャーの活動や学び、実践事例をふりかえり、事業終了後にも地域住民に広く配布できるよう、手軽にゴミの仕分け方を参照できるリーフレット（ネパール語10,000部、英語400部）と、じっくり読むブックレット（ネパール語8,400部、英語400部）の2種類の教材を制作しました。エコレンジャーたちのネットワークづくりや、さらなる研修の実施、ゴミ分別回収場所の設置に向けた準備などが進められています。

#### ゴミ箱から世界を見よう！ゴミ組成調査

6～8年生の生徒や担当教員を対象に、学校や家庭から出るゴミにはどんなものがあるか、ゴミの性質を明らかにするための授業として、学校の“ゴミ組成調査「ゴミ箱から世界を見よう」”を6校にて実施。授業の内容を考え、ファシリテートしたのは、ムラのミライと一緒に活動してきた地域の女性たちです。

### 2018年度の活動計画

#### アクション・プランの作成と実践サポート

学校や地域住民からの「地域でゴミを分別回収する場所をつくる」、「生ゴミを捨てずに堆肥にして、近くの農家たちと取引する」「ゴミの分別回収を業者に訴えかける」といったアイデアを実現可能で、継続できるものとするために、いつ、誰が、誰と、何をするのか、コストはいくらかかるのか…といった具体的なアクションに落とし込んでいくための作業をサポートします。

#### PROJECT DATA

#### 環境教育と地域住民主体の環境保全活動を通じた地域コミュニティの強化

**どこで** ネパール連邦民主共和国カトマンズ郡ゴカルネショール市・カトマンズ市

**だれと** 上記市内の学校・地域住民 約1,303人

（外務省「日本NGO連携無償資金協力」、トヨタ自動車（株）「トヨタ環境活動助成プログラム」、（公財）リそなアジア・オセアニア財団「環境プロジェクト助成」）

**なにを** バグマティ川の浄化と環境教育で、地域のつながりを取り戻す活動。2017年度からは、これまでの5年間のムラのミライの活動に参加した地域住民や先生たちが、主体となって環境保全活動に挑戦する学校や家庭を増やすための普及活動を、現地NGOのSOMNEED Nepalとともに支援しています。対象地域の住民が、外部の支援がなくとも、自分たちで活動を継続・展開していくことを目標としています。

# 西宮で取り組む、 分かり合い、助け合える子育て



## 2017年度の活動

### 子育て×メタファシリテーション講座

兵庫県西宮市で子育て中の女性の自立を支援するグループ「a little (ア・リトル)」の協力を得て、子育て中の親やその家族、兵庫県内の自治体職員に、メタファシリテーション講座を実施しました。計3回実施し、65人が参加しました。

## 2018年度の活動計画

### 「西宮で助け合う子育て」の現状を知る調査

兵庫県西宮市在住の産前産後の女性とそのパートナー、子育て支援者を対象に、子育ての現状を知るためのアンケートや個別インタビューを実施します。調査員は今、西宮市で子育てをしている女性たち。

- ・行政などの子育て支援制度に対する情報や知識の取得方法・活用例
- ・地図を使った子育て支援の(ひと・場所)資源図
- ・身近な支援者による支援内容 など

について調べていきます。これら調査結果は、次年度講座や助け合う仕組みづくりに活かします。

### 産前産後の女性およびパートナー／子育て支援者のための講座

- ・産前産後の女性およびパートナーを対象とした産前産後に必要な知識や技術を習得する講座
- ・子育て支援者を対象とした、産前産後の女性支援に必要な技術や知識に関する講座を実施します。

## PROJECT DATA

### ママの健やかな心と体サポートプロジェクト ～西宮で広げる、地域で助け合う子育ての輪～

どこで 兵庫県西宮市

だれと 産前産後の女性および子育て支援者

(ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会「2018年度助成プログラム」)

なにを 2017年度から、兵庫県西宮市で子育て中の女性の自立を支援するグループ「a little (ア・リトル)」の協力を得て、子育て中の親やその家族、兵庫県内の自治体職員に、メタファシリテーション講座を実施してきました。この経験を活かし、「a little」との協働で、西宮市在住である産前産後の女性たちとそのパートナー、そして子育て支援者を対象に、子育てに関する実態調査および講座を実施します。そして、子育てを支援される／する当事者自らが「地域で助け合える子育てとは何か」を考え、具体的な活動へと発展できるよう、メタファシリテーション手法を用いて支援します。

# ここに私が住むとしたら、 どういう生活を築いていくのか？ 「私の暮らし」から出発する、地域計画



## 2017年度の活動

「ここに私が住むとしたら？」地域計画づくり  
2017年度は、全4回の研修のうち、第1回から3回の研修を実施しました。

第1回：事実質問を活用し、地域の人たちから話を聞くフィールドワーク（2017年4月）

第2回：フィールドワークで見つけたことを、「時間」と「空間」の2つの軸で分析する（2017年8月）

第3回：地域計画を作ってみる（2018年1月）  
座学とフィールドワークを組み合わせ、研修参加者は事実質問を活用しながら、時間軸・空間軸で集落を捉える視点を学びました。そして、「自分がここに住むとしたらどんな集落を形成したいか」という視点で、地域に暮らすひとりひとりの生活を細分化する中から、地域計画に盛り込む要素を抽出・検討しつつあります。



## 2018年度の活動計画

**地域計画の最終化と共有**  
全4回の研修のうち、最終となる第4回を実施します。第1回～3回の研修を通じて検討してきた地域計画を最終化し、研修実施地域のみなさんと共有します。

### PROJECT DATA

**コミュニティファシリテーターを育てる実践研修  
～メタファシリテーションを用いた、住民主体による  
地域づくり～**

**どこで** 沖縄県名護市久志地区  
**だれと** 途上国や国内での地域づくりに関する活動を行っているNGO等の職員19人、研修実施地域の区長12人、名護市職員25人  
(JICA「NGO等提案型プログラム」)

**なにを** 沖縄県名護市との協働による研修プログラム。3泊4日×全4回シリーズの研修で、地域コミュニティによる課題分析→活動の形成・実施・・・というプロセスを実際に起こしていくことのできるファシリテーターを育成していきます。

## 2017年度の活動

### メタファシリテーション手法を学ぶ講座

メタファシリテーション手法を広める講座・研修を日本、ネパール、スリランカで開催しました。

- ・入門セミナー：23回開催し、210人が参加
- ・基礎講座Ⅰ：40回開催し、320人が参加
- ・基礎講座Ⅱ：4回開催し、24人が参加

### フィールドでメタファシリテーション手法を実践する研修

#### 日本でのフィールド研修

・獣害対策から地域づくりへ「猪！鹿！鳥！やっぱりヒト！」集落の現実を見るメタファシリテーション・スキルのススメ！！（岐阜県郡上市）：17人が参加

#### 海外でのフィールド研修

- ・コミュニティファシリテーター研修（インド）：5人が参加



### 書籍販売

『途上国の人々との話し方』をはじめとする書籍を販売。『対話型ファシリテーションの手ほどき』は好評につき、第三刷を発行しました。

### 専門家派遣

理事・職員・契約コンサルタントを他団体のプロジェクトや研修・授業・講演等に派遣しました。

#### 海外への専門家派遣

- ・プロジェクト・調査への専門家派遣：3件
- ・講座への講師派遣：2件

#### 国内での専門家派遣

- ・プロジェクトへの専門家派遣：1件
- ・講師派遣：19件

## 2018年度の活動計画

### セネガルの現場を撮影した映像教材の作成、発信

2017年度に引き続き、メタファシリテーション講座、書籍販売、専門家派遣を実施。

また、セネガルでの研修の様子や、村人へのインタビューの様子をまとめた映像教材を作成。研修・セミナーでの活用や、オンラインで発信します。

（パナソニック（株）「Panasonic サポートファンド for アフリカ」）

■活動計算書

(2017年4月1日～2018年3月31日)

(単位：円)

科目	金額
<b>I 経常収益</b>	
1. 受取会費	<b>533,000</b>
正会費	533,000
2. 受取寄付金	<b>6,027,151</b>
個人	4,690,095
企業・団体	1,337,056
3. 受取助成金等	<b>2,047,400</b>
受取民間助成金	1,988,000
受取国庫補助金	59,400
4. 事業収益	<b>35,922,698</b>
自主事業収益	10,528,629
JICA受託事業収益	25,274,069
政府・自治体受託事業収益	0
企業等受託事業収益	120,000
5. その他収益	<b>27,714</b>
受取利息	15
雑収益	27,699
<b>経常収益計</b>	<b>44,557,963</b>
<b>II 経常費用</b>	
1. 事業費	<b>12,621,199</b>
(1)人件費	10,892,507
給与手当	1,728,692
法定福利費	27,153,092
(2)その他経費	
<b>事業費計</b>	<b>39,774,291</b>
2. 管理費	<b>1,758,829</b>
(1)人件費	1,517,927
給与手当	240,902
法定福利費	1,271,098
(2)その他経費	
<b>管理費計</b>	<b>3,029,927</b>
<b>経常費用計</b>	<b>42,804,218</b>
当期正味財産増減額	1,753,745
前期繰越正味財産額	1,568,933
次期繰越正味財産額	3,322,678

■貸借対照表

(2018年3月31日現在)

(単位：円)

科目	金額	
<b>I 資産の部</b>		
1. 流動資産		
(1) 現預金	7,104,846	
(2) 未収金	2,095,682	
(3) 棚卸資産	868,584	
(4) 仮払金	93,191	
<b>流動資産合計</b>		<b>10,162,303</b>
2. 固定資産		
(1) 有形固定資産		
什器備品	0	
有形固定資産計	0	
(2) その他資金		
保証金	397,000	
その他資金計	397,000	
<b>固定資産合計</b>		<b>397,000</b>
<b>資産合計</b>		<b>10,559,303</b>
<b>II 負債の部</b>		
1. 流動負債		
(1) 未払金	5,061,827	
(2) 前受金	1,922,000	
(3) 未払消費税	0	
(4) 未払法人税等	72,000	
(5) 預り金	180,798	
<b>流動負債合計</b>		<b>7,236,625</b>
2. 固定負債		
(1) 有形固定負債	0	
(2) その他の負債	0	0
<b>負債合計</b>		<b>7,236,625</b>
<b>III 正味財産の部</b>		
前期繰越正味財産	1,568,933	
当期正味財産増減額	1,753,745	
<b>正味財産合計</b>		<b>3,322,678</b>
<b>負債及び正味財産合計</b>		<b>10,559,303</b>



2017年度については、収支ともにほぼ年度予算どおりの執行となりました。イラン事業の開始が当初予想（2017年度後半）より遅れ、厳しい資金繰りにも直面しましたが、セネガル事業へのご寄付、メタファシリテーション講座・研修の実施により、年度予算をやや上回る収入となりました。

今後は、不測の事態に対する財政的な備えが課題です。特に、イランでの事業が本格化するにあたり、イランに対するアメリカの経済制裁等、現地情勢が流動化する懸念が大きく、事業実施にあたり、不測の事態に対する財政面・運営面での備えが必要です。

# 2017年度 ムラのミライの活動を 支えてくださったみなさま

## 会員・サポーター

正会員：51人、サポーター会員：126人

(2018年5月現在)

一般寄付（個人）	2,631,195円
セネガル事業へのご寄付	1,051,756円
郡上若手サポート募金	76,000円
書き損じはがきのご寄付	212枚
企業団体からのご寄付・法人会費	1,190,000円

ご支援をありがとうございました

## ムラのミライ役員・スタッフ（2017年度）

### 理事・監事

代表理事	中田豊一：参加型開発研究所 所長
副代表理事	山田貴敏：笠原木材株式会社 代表取締役社長
専務理事	宮下和佳：（特活）ムラのミライ 事務局
常務理事	大塚由美子：笠原木材株式会社 職員
理事	小森忠良：元十六総合研究所 主席研究員
理事	和田美穂：社会福祉士
理事	久保田絢：愛知淑徳大学 ビジネス学部 講師
理事	山岡美翔：（特活）ムラのミライ 事務局
監事	河合将生：NPO組織基盤強化コンサルタント office musubime 代表
監事	岡本眞弘：税理士法人岡本会計事務所 代表税理士

契約コンサルタント 和田信明、原康子、M. Ramaraju

メタファシリテーション認定講師 松浦史典、久保田絢、近藤美沙子、永田賢介

事務局スタッフ 大塚由美子、光本昭子、和田アスカ（高山オフィス、2017年7月まで）  
宮下和佳、前川香子、山岡美翔、田中十紀恵（関西オフィス）  
菊地綾乃（セネガル駐在）

# ムラのミライについて

## 「ない」ことは本当の問題なのか？

認定NPO法人ムラのミライは、1993年に岐阜県高山市で設立されました。設立当初は「インド山村部の貧困層を助けよう」と、識字教室や収入向上活動など、「ない」ものを投入する支援から始まりました。

しかし、さまざまな活動を経て、都市化と市場経済化の進展がコミュニティとコミュニティの維持してきた自然資源やセーフティネットを衰退させ、多くの社会課題を生んでいること、それが海外・日本に共通する構造であることに気づきました。



## コミュニティに「ある」ものを引き出し、課題解決を促す

そこで、住民との対話を通じてコミュニティに「ある」もの＝彼らの持つ経験や知識を引き出し、住民自身による課題分析・解決を促す独自の「メタファシリテーション手法」を開発。徹底的に住民主体にこだわり、インド、ネパール、セネガルで、コミュニティが資源を維持、活用、循環させる仕組みや暮らし方を創り出していくためのプロジェクトを実施してきました。

## 地域づくりで、医療で、子育てで

「●●がないから、××ができない」という思い込みをひっくり返し、住民を本気で課題解決に向かわせる力を持つと、高い評価を受けるようになったメタファシリテーション手法。この手法を書籍『途上国の人々の話し方』やムラのミライの理事・職員・認定講師によるセミナー・研修で伝え、住民の行動変化を促すスキルを持つファシリテーターを育成してきました。国際協力分野だけではなく、日本国内での地域づくりや、医療・介護、子育てといった分野で実践する人が増えつつあります。



### メタファシリテーション手法とは（団体としての正式な定義）

メタファシリテーション手法とは、ファシリテートする側が当事者に対して事実のみを質問していくことによって、当事者が思い込みに囚われることなく自分の状態を正確に捉え、そのことによって自分の経験知から課題の解決につながる示唆を主体的に得る過程を創り出す手法である。またこの手法は、ファシリテートする側が事実のみを訊くことによって自分が現在何を訊いているのか正確に認知すること、すなわちファシリテートする側のメタ認知（meta cognition）を促し、ファシリテーションの過程そのものの客観性とファシリテートする側と当事者とのコミュニケーションの効果を最大限に担保する。